

A Study on the Names in Shakespearean Plays Especially “Romeo and Juliet”

川崎 正美¹⁾

Masami KAWASAKI

Shakespearean plays are made up of vast number of words. I focus on the frequency of the words used in the plays. First, I list up the frequency of the words in “Othello,” “King Lear,” “As You Like It,” and “Midsummer’s Night’s Dream.” And I also list up the frequency of the characters’ names in those plays. Second, I made the same research on “Romeo and Juliet.” To my surprise, the name ‘Romeo’ is called by many other characters in the play as many as 138 times. This is an incredibly big number. On the other hand, ‘Juliet’ is called only 43 times. What for? I survey the way how and the reasons why the two names are used like that.

Keywords: Shakespearean plays, word frequency, Romeo, Juliet,

1. はじめに

シェイクスピアの作品は膨大な数の単語で成り立っている。“Hamlet”は総語数 39,000 語を超えており、“Midsummer’s Night’s Dream”ですら 21,000 語以上の単語で作られている。相当な数であるが、その中でもかなり頻繁に使われる単語が存在する。次の表は①“Othello”、②“King Lear”、③“As You Like It”、④“Midsummer’s Night’s Dream”の作品中で使われている単語を頻度順に整理したものである。

	①	②	③	④
1	I (821)	The(871)	The(673)	The(546)
2	And(743)	And(670)	I(658)	And(531)
3	The(738)	I(633)	And(653)	I(435)
4	To(574)	To(532)	You(518)	To(329)
5	You(475)	You(457)	To(442)	You(274)
6	Of(443)	Of(956)	A(440)	Of(262)
7	My((416)	My(455)	Of(423)	A(259)
8	A(413)	A(370)	That(343)	In(238)
9	That(371)	That(347)	In(312)	My(199)
10	In(322)	In(289)	Is(285)	Is(191)
11	Not(315)	Not(278)	My(257)	That(185)
12	It(313)	This(236)	Not(250)	Me(176)

13	Is(290)	Me(228)	Me(233)	Not(170)
14	Me(281)	Your(225)	He(215)	With(168)
15	For(235)	Thou(219)	For(206)	This(148)

調査の為 ‘<http://wordhoard.northwestern.edu/>’ や ‘<http://www.mta.link75.org/>’ など、ネットワーク上のいくつかのサイトを利用した。サイトごとに 10 語前後の違いがあったが、本論文では ‘<http://www.mta.link75.org/>’ の数字を用いることにした。

いずれの戯曲においても、頻度上位の単語のほとんどが一致していることがよく分かる。悲劇であれ喜劇であれ、頻度 1 位から 3 位までは ‘I’ が ‘And’ が ‘The’ のいずれかであり、頻度 4 位と 5 位は ‘To’ が ‘You’ のいずれかである。また、6 位以下についても、順位こそばらつきはあるものの、同じ語が多くランクインしている。どの作品においても文章を構成する単語は同じような頻度で用いられていることが分かる。

では、‘Othello’ や ‘Lear’ など、登場人物の人名についてはどうだろうか。次の表は①“Othello”、②“King Lear”、③“As You Like It”、④“Midsummer’s Night’s Dream”の作品中で使われている人名を頻度順に整理したものである。

1) 東京都立産業技術高等専門学校 ものづくり工学科 一般科

	①	②	③	④
1	Cassio (112)	Edmund (31)	Rosalind (58)	Demetrius (40)
2	Iago (58)	Cordelia (20)	Orlando (26)	Hermia (36)
3	Desdemona (41)	Kent (19)	Phebe (17)	Lysander (36)
4	Othello (24)	Lear (18)	Audrey (14)	Helena (23)

回数が多いのは“*As You Like It*”の‘Rosalind’と“*Othello*”の‘Cassio’であるが、これは直接呼びかけられるというより、他の登場人物達の話題の中で(噂話的に)使われていることが多いからだと思われる。面白いのは主人公の名前の使用頻度は非常に低いことである。その理由は作品によって異なるのであろうが、“*Othello*”や“*King Lear*”のように身分の高い主人公の場合、主人公は‘Lord’、‘Moor’などの別の呼び方で使われているからであると考えられる。話をするとき相手を名前前で呼ぶことは多いが、王や目上の人間を呼ぶ場合は別の呼び方になるのは順当な有り様である。“*Midsummer’s Night’s Dream*”においては‘Demetrius’、‘Hermia’ ‘Lysander’、‘Helena’の四人の恋に苦しむ若者の名前が同様の頻度で用いられているが、回数は全て40回以下である。シェイクスピア作品中で人名が、特に主人公の名前が使われる頻度はさほど高くないのである。

2. “*Romeo and Juliet*”に関して

では“*Romeo and Juliet*”の場合はどうであろうか。次の表は作品中で使われている頻度順に語を整理したものである。

1	And (667)	9	That(343)
2	The(661)	10	In(314)
3	I(570)	11	You(289)
4	To(515)	12	Thou(277)
5	A(447)	13	Me(262)
6	Of(382)	14	Not(257)
7	My((356)	15	With(234)
8	Is(343)		

先ほどの表と見比べて、‘I’、‘And’、‘The’、‘To’の扱いは他の劇と同じであることが分かる。目立つのは‘You’の頻度が非常に低いことと、‘Thou’の頻度が非常に高いという点である。しかし、これは裏腹の関係にあり、共に「二人称」を表すこの二つの関係の中で、‘Thou’の一部を‘You’として合算すれば、‘You’の頻度は上位に上がり、

‘Thou’の頻度は下がってくる。‘Thou’が多く使われているのは、恋人同士がお互いを親しく呼び合う場面が多いからで、“*Macbeth*”における‘Macbeth’と‘Lady Macbeth’の二人の会話と非常によく似ている。

作品中で使われている人名についてはどうだろう。結果は次のようになった。①‘Romeo’…138、② ‘Tybalt’…46、③ ‘Juliet’…43、④ ‘Montague’…21。

驚くべきことに、‘Romeo’が突出して多い。主人公の名が作品中で使われているという点では、他の作品と比べて桁外れに多い。異常な多さである。なぜシェイクスピアは‘Romeo’という名を作品中で多用したのだろうか。

3. ‘Romeo’の使用例

‘Romeo’という名が作品中に初めて登場するのは、1幕1場、‘Lady Montague’の“O, where is Romeo?”である。これはロミオに向かって直接話しかけられたわけではなく、‘Benvolio’に向かってロミオの所在を尋ねたものである。様々な場面で‘Romeo’という名は使われるわけだが、誰が誰に対する会話の中で‘Romeo’を使っているのかを調査した。

No	幕	場	From	To	回
1	I	i	Lady Montague	Benvolio	1
2	I	i	Benvolio	Romeo	3
3	I	i	Romeo	Benvolio	1
4	I	ii	Benvolio	Romeo	1
5	I	iii	Mercutio	Romeo	1
6	I	v	Capulet	Tybalt	1
7	I	v	Tybalt	Capulet	1
8	I	v	Nurse	Juliet	1
9			Chorus	monologue	1
10	II	i	Benvolio	Romeo	2
11	II	i	Mercutio	Romeo	3
12	II	i	Benvolio	Romeo	3
13	II	ii	Juliet	monologue	6
14	II	ii	Romeo	Juliet	1
15	II	ii	Juliet	Romeo	6
16	II	iii	Lawrence	Romeo	1
17	II	iv	Mercutio	Benvolio	1
18	II	iv	Benvolio	Mercutio	1
19	II	iv	Mercutio	Benvolio	1
20	II	iv	Benvolio	Mercutio	2

21	II	iv	Mercutio	Romeo	2
22	II	iv	Nurse	Romeo	1
23	II	iv	Mercutio	Nurse	1
24	II	iv	Nurse	Romeo	1
25	II	iv	Benvolio	Romeo	1
26	II	iv	Mercutio	Romeo	1
27	II	iv	Nurse	Romeo	1
28	II	v	Nurse	Juliet	1
29	II	v	Juliet	Nurse	1
30	II	vi	Lawrence	Juliet	1

以上 2 幕 6 場までで 49 回'Romeo'が使われており、冗長なので割愛した後半 3 幕 1 場から最後の 5 幕 3 場までで残りの 89 回が使われている。

では、'Juliet'の場合はどうだろう。

No	幕	場	From	To	回
1	I	iii	Nurse	Juliet	1
2	I	iii	Lady Capulet	Juliet	2
3			Chorus	monologue	1
4	II	ii	Romeo	monologue	1
5	II	vi	Romeo	Juliet	1
6	III	i	Romeo	monologue	1
7	III	ii	Juliet	Nurse	1
8	III	iii	Romeo	Lawrence	4
9	III	iii	Nurse	Lawrence	1
10	III	iii	Nurse	Romeo	1
11	III	iii	Romeo	Nurse	1
12	III	iii	Lawrence	Romeo	1
13	III	iv	Capulet	Paris	1
14	III	v	Romeo	Juliet	1
15	III	v	Lady Capulet	Juliet	1
16	IV	i	Lawrence	Juliet	1
17	IV	ii	Capulet	Juliet	1
18	IV	iv	Capulet	Nurse	1
19	IV	v	Nurse	Juliet	1
20	IV	v	Capulet	Nurse	1
21	V	i	Romeo	Balthasar	1
22	V	i	Romeo	monologue	2

23	V	ii	Lawrence	monologue	1
24	V	iii	Paris	monologue	1
25	V	iii	Romeo	monologue	4
26	V	iii	Lawrence	Juliet	1
27	V	iii	1st Watchman	2nd Watchman	1
28	V	iii	Lady Capulet	Prince	1
29	V	iii	1st Watchman	Prince	1
30	V	iii	Lawrence	Prince	2
31	V	iii	Balthasar	Prince	1
32	V	iii	Prince	All	1
33	V	iii	Montague	monologue	1
34	V	iii	Prince	monologue	1

これで全てである。ジュリエットは独白で何度も(正確には 16 回)ロミオの名前を口にしますが、ロミオの方がジュリエットの名前を口にするのはわずか 8 回にしか過ぎない。家を捨て、自分の命を危険にさらしてまで、ジュリエットはロミオに集中していく。そんなジュリエットに比べ、ロミオには覚悟の甘さがあったのではないか。マキューショの死に対して一端の責任があり、ティボルトやパリスの殺害に対しても自分自身の責任を果たすことができない。ロミオはただ運命に翻弄されるがままだった。

4. 終わりに

物の名前などというものは単なる符号で、「バラ」と呼ばれなくてもバラの美しさに変わりはない。ロミオと呼ばれなくてもロミオに変わりはない。両家の軋轢の狭間の中で、ジュリエットは続けてこうも言っている。

“Romeo, doff thy name,
And for that name which is no part of thee
Take all myself.” (2 幕 2 場)

「ロミオ、あなたの名前を捨てて、
そしてそんな名前の代わりに
私を受け取って。」

「名前を捨てて、」と懇願しながら、ジュリエットはロミオを「ロミオ」と呼ぶしかなかった。自分の両親を捨て、自分の命まで捨て去っても、なお名前を捨てることはできなかった。捨てられなかったというより互いの

両親や周囲の者達の意識を変えられなかったのだ。名前というものは自分で使うというより、他者が使う性質のものであるから、アイデンティティーの証明は他者の手に委ねるしかない。こういったアイデンティティーを主題にしている作品は、“Comedy of Errors”や“Macbeth”など、悲劇、喜劇を問わずシェイクスピア作品には多く存在しているが、“Romeo and Juliet”もまた、‘Name’をキーワードに、変えることが不可能なアイデンティティーに立ち向かい、敗れ去った二人の物語であったのだ。

この物語がやるせないのは、二人の報われない死という結末だけが理由ではない。

物語の最後にモンタギューは言う。

“I will raise her statue in pure gold”

「純金でジュリエットの像を建てるつもりだ。」

キャピュレットは答える。

“As rich shall Romeo's by his lady's lie”

「純金のロミオの像をジュリエットの隣に建てよう。」

何という俗物ぶりだろう。願わくはこの像に「ロミオ」と「ジュリエット」という「名前」が刻まれませんように。